

【シンポジストより】

支援業務から見たコロナに対するアンビバレンス

亀山 美沙紀（一般社団法人公心会 あいち保健管理センター）

世界中の人々を震撼させている新型コロナウイルス感染症（COVID-19; 以下コロナ）は、心理支援の場にも両価性を与えている。

例えば、人々の健康への意識が上がったことは、他の感染症への感染予防にもなっている一方で、他者に対しても過剰に感染予防を強制することによる衝突や、コロナ感染者に対する冷遇などの対人関係のトラブルを引き起こしている。

心理的支援での両価性を言えば、不安症・強迫症の症状における行動が、ある意味適応的な行動とみなされる場面も否定できないことがある。程度によっては外出の自粛や手洗いはむしろ推奨されるべき行動とされる。そのため、社交不安症のクライアントに外出を促しにくい場面や、不潔恐怖から強迫症とされているクライアントの手洗い行動が適切とされる場面が生じている。これらのクライアントに対してどのような支援を実施していくかは、支援者の力量が試され、今後も私たち支援者にはコロナを踏まえたうえでの支援の視点が必要となっていくのである。

支援者としての立場を抜きにしても、このような社会で過ごす私たちにとって、コロナがある生活への慣れや対策は不可欠である。コロナの「せい」な出来事があった一方で、コロナが「あったから」な出来事も身の回りで起こっているかもしれない。

コロナに対して、安心し過ぎず、かといって心配過ぎずといった、楽観的でも悲観的でもなく「中庸」な態度で今後も向き合っていく覚悟が私たちには必要ではないだろうか。

新型コロナウイルスが及ぼした働き方への影響

柿崎 梢恵（岩手県南広域振興局）

緊急事態宣言が発令され、5月には交代制勤務が始まり、週の半分は在宅で勤務を行うことになった。

しかし情報漏えい防止の観点から書類やパソコンの持ち帰りはNGとされ、自宅から職場のネットワークにアクセスする権限も一部に限定されるなど、環境が十分に整っているとは言えない状況であった。私が在宅勤務でできたことは、昨年度予算決算額をエクセルで計算することのみだった。予定していた仕事が全くできないなか、「これでいいのかな」と思いながら黙々と作業をしていた。

通常業務再開後、保健所職員の業務の多忙化を受け、保健所以外の職員も検体搬送や患者搬送の当番が割り振られるようになった。国内の感染者が増えていくなか、昨年度から準備していたイベントは中止・延期を余儀なくされ、1から（0から）やり方を見直す必要が出てきた。

会議や講演会、研修、打ち合わせは、職場内外に関わらず殆どオンラインで行われるようになった。今まで、オンラインで外部の人と会議等を行う際、職場のパソコンではなく、個人の携帯電話を使わざるをえなかったが、庁舎内での需要が増えたことにより、職場に web

会議用のポケット Wi-Fi が設置された。

これまでの新型コロナウイルスの感染拡大による生活の変化を通して、良かった点は何かを考えてみたが、思いつかないのが正直なところである。やろうと思っていた事業が出来なくなったこと、業務がほとんどできない期間があったことなど、どうしても苦労したことや悪い点ばかり思い出してしまう。

しかし、この生活の変化が庁舎内の Web 会議環境が整備されるきっかけになったことは間違いない。庁舎内で気軽に会議や打ち合わせができるようになったことから、盛岡での会議のために丸一日使う必要がなくなった。また、コロナウイルス感染拡大を受け、事業の在り方を検討している今の状況は、今までやってきたことを見直す機会にはなっていると考えることができるだろう。

新型コロナウイルス感染症の収束の兆しが見えないなか、これからはすぐに中止とするのではなく、どう事業を「続けていくか」、今まで通りできないのなら別の手段で目的を達成できないかを検討することが必要になるだろう。今後の感染状況によっては、必要な業務と保健所支援業務が軸になっていくことも考えられる。この状況下で県職員として本当にやるべき仕事は何か、出来ることは何かを問いながら日々を過ごしていきたいと思う。

学外進学者の観点によるコロナ生活の両義

相澤 昂汰（東北大学大学院）

私の現在の所属は東北大学大学院文学研究科総合人間学専攻心理学研究室である。そこで、私の発表では他大学へ進学した立場としてコロナ禍の生活がどのような意味を持つのか、その両義性について簡便に述べていく。

まず、4月から6月まで大学への入構が制限され、差し迫った理由がない限りは学内での活動は不可であった。そのため、説明会は中止となり、配布物は郵送、授業や演習はすべてオンライン上という形式で実施されるようになる。そんな状況下ではあったが7月になると入構規制も一部緩和され、授業もごく一部の対面が可能となる。そのタイミングに合わせて私自身も生活の拠点を仙台市へと移す運びとなった。8月以降、夏休みを経てからは実験も感染対策を徹底したうえで徐々に実施されるようになり、10月以降の後期授業では対面授業も部分的に可能となった。

そのような生活を送ってきた私が with コロナの生活として感じた両義性は次のようにまとめられる。まず負の側面については人間関係の新規構築の停滞、オンライン授業に当たった際の難点、研究活動の停滞である。そして正の側面については、オンライン授業の利点の発見、将来や進路について熟慮する期間としての活用、これまで見過ごされてきた新たな研究テーマの発見、そして既存のシステムの再考・活用という点が挙げられる。

with コロナ 新聞業界の両義性

吉田 杏奈（新聞社販売局）

新聞社の販売局の使命は、日々発行される新聞を読者の元へ届けることである。新聞は、新聞社から、販売店を通して読者のもとへ届けられる。そのため、販売店の存在が不可欠で